

文化の比較可能性

— アフリカ・ヨーロッパ・日本 —

川 田 順 造

ご紹介にあずかりました川田順造です。

きょうは文化の比較可能性——アフリカ・ヨーロッパ・日本——という題でお話をさせていただきます。かねがね私が提唱しております文化の三角測量、三つの参照点をとって文化を比較するというこの意味について考えておりますことを述べて、皆さまからご質問やご意見をいただいて勉強する機会にさせていただきますと思います。

文化の定義については後にも申しますが、文化ということばをたとえば文化人とか、文化勲章とか特別に優れたものの洗練されたものを指すという意味にとらないで、人間の生きる営み、衣食住をはじめ精神文化も含めて人間の生きる営みの全体を指すというふうに広く解釈します。そういう意味での文化は、私たちは普段は意識しないで生きているものなのですね。それが自覚されるのは、異なる文化との対比においてであるといえると思うのです。

たとえば私は東京の下町に生まれまして、二八歳の時にはじめて、船に乗ってインド洋をわたってフランス

に留学しました。そのころは今とちがって学生時代にヨーロッパにいくというのはめずらしかったのです。フランスでまず食べ物の味に塩気が少ないということに驚きました。日本の中でも関東特に東京の下町などというの是一般に味付けが濃いのです。

はじめはうんぴっくりしましたけども、そのころは日本でも今のように本格的なフランス料理などというものはふつう食べる機会がありませんでしたから、はじめてそういう塩気の少ない西洋の食事というものに接したわけです。

足掛け三年それを食べて帰ってきますと、今度は日本の食べ物が塩からくて困りました。味噌汁にしてもとにかく塩からいし、おそばを食べればつゆも辛い。それから漬けものもたいそうからい。同じ船でフランスに留学した医者の方は、だからヨーロッパ人はあれだけ肉や乳脂肪をとっても脳卒中が日本人より少ないんだと感心していました。

人間以外の動物でも、牛や羊のような草食獣は塩をよこんでなめます。これはカリウムとナトリウムの結びつきが必要だという生理的な理由からです。日本人もやはりカリウムの多い植物性の食物を中心に、塩味が強いおかずでごはんをたくさん食べるというのが、古くから食生活の基本だったからそうなのでしょう。そういう、よく考えればわかりきったことでも、直接の体験がないとなかなか自覚しにくいものだと思います。では文化をもう少し意図的に比較しようとした場合、どういうやり方があるでしょうか。まず大きく分けて二つの方向を区別することができます。

ひとつは「通文化的」とでもいえるでしょうが、ある要素について世界のいろいろな文化を比較するやり方です。それに対してもうひとつのほうはそのものがある文化の中もっている意味をその文化の中に置い

て、考えてみる。それを私は通文化的に對して「文化内的」というふうに呼んでいるのですが、言語学の用語 phonetic と phonemic、音声学的と音韻論的というふたつのことばからとって、etic と emic ということばで對比することもあります。

たとえば人間はほぼかなり広く、着るものというのを何かしら身につけてることが多いわけですけども、そういう衣いというものを通文化的に比較した場合には毛皮から織物、織物にしても毛織物から綿織物、それから麻から絹からいろいろなものがあります。木の皮をけずってたたいた「樹皮布じゅひふ」などというものも、オセアニアなどでよく使われていますし、「衣」というものをもって、これについて通文化的に、つまりいろいろな文化を通して比較することが出来ます。

それに対して、着るということがたとえば日本文化全体の中でどういう意味をもっているかということを考えて、それをたとえばポリネシアのある文化の中での着ることの意味と比較してみた場合、それが文化内的な比較ということになるわけですね。

これに對する etic と emic ということばのもとになっている二つの用語のうち、まず phonetic というのは音声学的ということなんです。発音されるある言語音そのものを、音として通文化的に研究するという立場ですね。たとえば日本語では英語やフランス語では区別される L と R が、らりるれるでは区別されていなくて、英語の L と R の中間のような音で発音していますけども、同じ区別する言語でも、英語とフランス語の L の音、R の音はちがいます。そういうふうな、ある音をとりあげて、通文化的に比較研究するということができます。

それに対して文化内的、音韻論的というのは phonemic つまり、日本語のらりるれるという音、あるいはもっと簡単のために母音にしてもいいですけども、現代日本語では「あいいうえお」と五つの母音がありますね。

古代日本語では七つぐらいあったらしいですが。これを問題にする場合には、たとえば通文化的に「あいいうえお」の「あ」という音を問題にする場合には、私が「あ」と発音するのとほかのひとが発音するのと日本語の中でも違いますし、私が発音した場合も、今日と明日で厳密に言えば少しちがってくるかもしれない。他の言語における「あ」の音はさらに多様で、英語でも日本語の「あ」にほぼ対応するような母音がいくつもありますね。

それらを通文化的に比較して研究することもできますが、今度は文化内的に、日本語という音韻体系の中で考えた場合には、音高が私の「い」という発音と他の人と違っている、あるいは少し緩んだ音だとか閉じた音だとかそれはかまわない。それはあいいうえおという五つの母音の中ではかの四つの音と区別できるものとしてあれば、それで十分役割が果たせるわけです。そういう言語学における通文化的比較と文化内的比較の対比を比喩的にあてはめて、etic-jemicということを経る文化の比較を考える場合によくいうわけです。

もうひとつは、今度は比較というものの設定の仕方、私は二つの行きかたがあると思うのです。

ひとつは連続の中で比較をする。たとえば日本の文化について考える場合に、日本の文化が大変古くから影響を受けた朝鮮半島であるとか、あるいは中国であるとか、あるいは東南アジアであるとか、そういうところの文化と比較をする。こうした連続の中の比較では、歴史的な伝播とか影響、その後の変化などが問題になります。

もうひとつは断絶の中の比較で、私が提唱している文化の三角測量の場合、むしろ断絶の中の比較なんです。たとえば日本と西アフリカの内陸社会の場合非常にちがっているしお互いにごく最近までは、直接の交渉はまったくなかった。そういう断絶したものを比較する。ではそういう断絶の中の比較はどういう意味がある

かといいますと、これは、前の連続の中の比較の「歴史的」に対してむしろ「論理的」といえるでしょう。文化というものを成り立たせている原理、それについて考える上の発見的な意味をもつ。発見的というのは英語だと heuristic、フランス語で heuristique という言葉がありますけども、断絶してまったく異なったものを対比することによって、そうでなければ気がつかなかったことが発見できる。たとえばさっきのお料理の味付けが塩辛いということでもいいんですけれども、全体に味付けが塩辛い料理体系のものを食べることによって、日本料理の味付けが塩辛いということが発見されるわけです。日本だけにいたのではあたりまえだと思って感じないのが、ぜんぜん違うものと対比することによってそれが自覚される、そういう発見的な意味があります。

そういうところから、今度は断絶的な関係にあって、意味のある違い方をしているものを三つとって比較をしてはどうかというのが、私の意見なのです。私がはじめからそういう見通しをたててアフリカやフランスを研究してきたわけではなくて、私自身のたどった研究生生活の経過から、結果としてそうなったのです。

文化の比較をする場合、今までは東西比較文化論が多かった。日本とヨーロッパとかあるいは東洋と西洋、そういう東西間の比較が多かった。しかし今の地球時代には、そこに南という視点も加えて、二つでなく三つ参照点を設けたほうが、より広く人類の文化というものについて考えられると思うのです。それら南という東西とはかなり異質な視点をいれることによって、発見的に見えてくるものも多いのではないかということを私の研究生生活から感じるようになったのです。

私ははじめ東京大学にできたばかりの文化人類学科に進んだわけですが、日本民俗学、特に折口信夫の芸能史研究に興味がありました、そういうところから民俗芸能とかお祭りとかを調べによく学生時代歩きま

した。そこから柳田国男の民俗学にも興味をもって学生時代ずいぶん農村調査もしました。柳田国男先生の最晩年に何度か直接お会いしてお話を伺ったこともあります。

しかし大学院に進んで文化人類学というのはやはり人類という視野で文化のことを考えなければいけないと先生にいわれ、私もそう思いました、どこか日本以外のことをやるとすれば私は日本と思いきりちがうところについてみたいと思いました。せっかく日本を離れるのにまた田んぼがあって牛が田を耕しているというふうなところではどうもあまり変りばえがしないと思ったのです。その意味で、はじめはメキシコの高原地帯にかつて栄えたアステカ文明に惹かれたのです。スペイン軍に滅ぼされたわけですけども。メキシコ高原地帯は乾燥がはげしく、とうもろこしをつくって石の大神殿があって、太陽を信仰して人身御供をやっている。石にきざまれた絵のモチーフにしても、日本とは感性がまったくちがっているように思えて、そこに興味があったのですが、講義をうけた岡正雄先生のおすすりもあって、西アフリカの内陸の旧モシ王国になりました。

旧モシ王国を選んだきっかけは一枚の写真でした。当時研究室にあった数少ないアフリカの本の中にヴェスターマンという言語学者で歴史も研究していたドイツ人の書いた本があって、その中に、その後私が三〇年つきあうことになったモシ王国の王様の前で、臣下が土下座をしている写真があった。そしてその王様の宮殿というのは焼いてない土作りですけどもレース編みのように精巧な造りなのです。地球上にこういうところがあるんだったら、自分もそこにいてみたいと考えたのがはじまりです。そのモシ王国にも、その写真を見てから数年後には結局行きましたし、その写真よりもっと夢のような王様の前で、臣下が土下座したりしてる写真もとりました。西アフリカを選んだのは、やはり日本と非常にちがっていると思われたからです。地理的にも日本から離れた地球の向こう側にあるし、サバンナという熱帯の草原で焼き畑農耕をしている黒人の世界、そ

ういうところに行ってみたいと思った。しかしそのころ日本ではアフリカ専門の学者もいませんし、日本語で書かれた本など一冊もありません。アフリカ学事始めの第一世代だったわけです。フランスとかイギリスはアフリカに植民地を持っていた関係で、アフリカ研究の蓄積もあって学者も大勢いる。とくにジョルジュ・バランディエというアフリカ社会学の先生をたよってフランスにいったわけです。同時にフランスの学問の理論的な面にも、デュルケームやモースなどの社会学ないし人類学、モースの成果を受け継いだクロード・レヴィ・ストロースという先生の人類学の考え方にもたいへん興味があって、それでアフリカの勉強をするためと、人類学や社会学の理論の勉強のためにフランスに行ったわけです。つまり私ははじめはフランス経由でアフリカを見ることを学んだといえます。しかしその後アフリカの、とくにもとフランスの植民地だった国に暮らしてからは、アフリカを通してフランスを見るようになったといえます。

モシ王国というのは、一八九七年にフランスに軍事侵略されて植民地になった現在のブルキナファソという国の中にあるのですが、植民地時代も一九六〇年にフランスからの独立以後もフランス語圏、つまりフランス語が公用語の国なんです。その後三〇年間、日本とフランスとそれから西アフリカを行ったり来たりして、モシ王国だけでなくもっと広く西アフリカを歩きましたけれども、結局通算してアフリカには八年、それからフランスもはじめ留学したあと、向こうの研究所に呼ばれたり、パリの大学で教える機会もあったりして、通算してやはり八年暮らしまして、その間フランスの地方も歩き、民俗学者ともつきあって、フランスそのものを人類学的な関心の対象として研究することを細々と続けてきたわけです。そういう生活の中で、つまり日本とフランスと西アフリカをいったりきたりしながら研究をしていますと、外国にいて日本のことを考えるときには、自分のよく知っているフランスと西アフリカという二つを参照点にして考える、それからフランスにつ

いて考えるときにはアフリカと日本を参照点にする、アフリカについてはフランスと日本というふうにならざるに二つの点からひとつの点を照射して考えることが習性になったのです。これは一対一で二つを比較するよりも、参照点が三つあったほうが一つを他の二つの点からより相対化し対象化することが容易になるわけです。これは偶然結果としてそうなったわけですが、日本という黄色人種が作ったアジアの文化のひとつの例と、フランスという白色人種が作った西洋文化のひとつの典型、それから旧モシ王国の文化をはじめとする西アフリカ内陸の農耕民の黒人が作ったアフリカ文化、という人類全体を考えるうえでもかなり代表性のある三つの参照点というものが得られた。しかも、その三つは一九世紀のおわりまでは、互いに交渉がなかった。アフリカの場合もフランスに植民地化されたのが一九世紀の終わりで、実際にフランスの支配と文化の浸透がはじまったのはそれよりもっと遅いのです。ですから、それまでつまり一〇〇年くらいまえまではそれぞれ独立にそれぞれの道を歩んできた三つの文化というものを比較することに興味をもったわけです。それと同時にフランスは私がそういう問題を考える学問の方法、というか物の見方をつくった、つまり民族学とか人類学という学問を発達させた文化なんですね。ですからそういうものを作り上げた文化というものを、根底から研究してみたいという願望もあったわけです。

それでは文化を三つとりあげて比較をする場合、どのように単位をとれば文化は比較できるかが問題になります。そのためには文化というものをまず定義しなければならない。何を文化と呼ぶかということになると思います。

まず日本語でいう文化というのは中国起源で、「文徳をもって民を治める」という、支配者が武力で威圧するのではなくて文徳をもって民を治める、そういう意味で元来使われたようです。ですからこの場合は、文化

というのは武力に対置させられているわけですね。

それと同時に「みやび」と「ひなび」ということばがありますけれども、雅^{みやび}というのは、「みや」つまり天皇の宮殿で、「みやこ」というのはその宮殿のあるところという意味です。それに対して鄙^{ひな}というのは田舎のひなびた粗野なしきたりということですね。みやびとひなびという対比の中での、洗練されたものとしての文化という意味も、日本にはあったようです。

それに対してヨーロッパではご承知のようにラテン語の“cultura”つまり「耕された土地」という意味があつて、それが野放しの状態に対比させられた。それが人間の営みを指すような意味で用いられるようになったのはそんなに古いことではなくて一八世紀の終わりから一九世紀になってと考えられます。その後ヨーロッパでは文化というのは自然“natura”というものに対置させられてきたわけです。しかしヨーロッパでも日本の文化人と同じように、洗練されたものを指すのにも使われていて、それがだんだん人類学とか民族学の影響もあつて、人間の営みの総体を、その価値の上下を問わないで指すように意味が広がってきました。

人間の文化との対比で自然を考えるのは、これはヨーロッパ的な、それも近代の知的な領域で用いられはじめた考え方ではありますけれども、ひとつの重要な指標になります。それでは自然というのは文化との対比でどう考えられるか。自然と文化という対比ではないけれども、そのような対比自体が、いろいろな文化、例えば今私がとりあげた三つの例、日本とフランスと西アフリカのモシ社会、それにもやはり同じような対比が、別のことばでそれぞれ民俗語彙として、それぞれのものもとの観念の中であるのです。

日本では家に対して野、里に対して山という対比があつて、家畜に対して野獣、里芋に対して山芋などとい

里芋というのは里で、つまり畑で栽培される芋です。これは日本に稲作が導入される前に古くから日本にあった栽培植物だとされていますけれども、ですから十五夜のお月見のときに里芋を月に供える。十五夜というのは里芋の収穫祭だったといわれています。お正月のお雑煮にも里芋をいれるところが多いんです。これは里芋というものが日本人の生活の中にもっている古くからの重要な役割を示すわけです。それに対して山芋は、これはいまではおが屑の中で栽培された大和芋みたいなものが多いですけども、いまでもほんとうに山でとれる、野生の自然薯じねんじょというのはずいぶん高価ですが、あれは山で掘ってくるんですね。私も子どものころとったことがありますけども、そっくり掘りだすのがたいそうむずかしいんですね。木の間に細くうねうねとのびていて、それを竹の先に幅の細い鉄の刃をつけた棒で掘りとっていく。あの芋はもろくて折れやすいので、上手にまわりを掘って引き上げないとなかなか全体があがってこない。ですから今でも本当の自然薯は一本何千円とするぐらい高いんですね。そのかわりとろろにしても粘りがあっておいしいわけですけども。そういう山芋というのは山に自然に生えるものですね。

日本では山というのは、これは東海道線のように平地の多いコースを旅行してもすぐおわかりのように、家や町のすぐそばにあって、ぽこっと小高いだけですけれども、木が密生していて、人が住めないし田畑も作れないのですね。昔話の中でも旅人が夜、山の中の一軒家に泊めてもらうと、夜中におばあさんが庖丁を砥ぐ音で目が覚めて、逃げるとあとを追ってくるとか、山というのはこわいところですよ。こういう鬼婆おにばばがいたり、山男や狼とか熊も出てくる。日本はいまでも総面積の約七五％は人が住めないし田畑もできない山地だといえます。ところがヨーロッパの場合山というのは、チョコレートチョコレートの箱についているアルプスの牧場や山荘の絵のように、山の上にまた広々とした別の快適な世界があったりします。ですからヨーロッパでは移牧、トランスヒュー

マンス、夏に羊の群れを山の上に連れて行って牧草を食べさせて、冬になると下の平野に降ろす。つまり季節に応じて上下の移動をする牧畜の形態がとくに南ヨーロッパを中心に発達したわけです。日本に明治以後それを持ちこんだのは西洋人で、軽井沢、あれは西洋人が日本にきてそういう山の上の快適な生活を実現したいと思ってできた町だといわれています。ですから鬼婆も出てこないし、テニスを楽しむような、そういう山の快適ライフというのができたわけですが、それは日本の場合明治以後のことで、里にたいして山、家に対して野という対比が基本的にあります。

ヨーロッパの場合は、家に対するのは、今申しましたような自然条件のちがいで、山でなくて森なんですね。これはラテン語の家「ドムス」(domus)と森「シルバ」(silva)という対比で表されています。家、ドムスは英語の“domestic”、フランス語の“domestique”のもとになった言葉で、“silva”はその後変化して“savage”(英)、“sauvage”(仏)になりました。ゲルマン系ではドイツ語の“Wald”森と同根の英語の「ワイルド」(wild)などのことがあります。日本語の家畜と野獣の対比は、英語の例を使えば“domestic animal”と“savage animal”なり“wild animal”です。日本の「山猫」にあたるのは“wild cat”です。森は一一、一二世紀ぐらいにヨーロッパで森林の大伐採が行われて人間の住めるところがずいぶん広げられたのですが、それでもいまもヨーロッパに行くとき、平地を歩いていて、あちこちで深々とした森にめぐりあいます。森というのは赤ずきんのお話のように狼がでてきたり、白雪姫のお話のように小人が森の中にいて、宝物を隠していたり、野獣や小人のような、人間の力のおよばない、人間の生活領域とはちがうところとして考えられてきたのです。しばらく前まで狼もたくさんいた。そういう家対森という形での、人間の領域と人間のコントロールを越えた領域との対立が考えられていた。

それからアフリカのモシ族の場合ですが、ここには「イリ」と「ウエオゴ」という対比があって、イリというのは家なんです、もっと広い意味で人間の生活領域という意味がある。それに対してウエオゴというのは、この西アフリカ内陸は、見渡す限り平野で、車でどんどん走ってもまわり中に地平線が見えるという真平らなところで、山も森もない。草原のあちこちにハオバブのような巨木に混じって灌木がまばらに生えている熱帯の大草原なんです。いわゆるサバンナです。

そういうところで、人間の領域ではないウエオゴというのは人里離れた原野、荒れ野を指すのです。そこはライオンとかハイエナとか象とかの野獣が支配する領域で、ちょうど白雪姫の小人みたいな「キンキルシ」という頭でっかちの小人、赤い小人と黒い小人というのですが、足を使わずに移動するとか、荒野の中を歩いていてそれを見たという人もいますけれども、そういうものが住んでいるところとして考えられている。アフリカの場合、おもしろいのは、この荒れ野の領域と人間の領域というのが時間によって境目が移動するのです。昼間は人間の領域が広がっていて、「キンキルシ」とかそういうものたちはずっと人里から遠く離れたところにひっこんでいるのですが、夜になるとウエオゴの領域が広がってきて、人間の領域が逆に狭められる。この辺は大都会を離れると電気もありませんし、夜、かすかな石油ランプの火とか、炊事をしたあとの火のまわりにみんな集まってきて、昔話やなぞなぞ遊びをする。満月の夜などはサバンナに一面霜がおりたように白々と明るいですけれども、月のない夜は星明かりです。そういうところで夜になると闇とともに野の領域がぐっと広がってきて、うちの中まではいりこんで、人の背中までくるといわれている。この荒れ野のキンキルシというのが人間の一種の反世界をつくっていて、人間が子を産む、子が生まれる、それをつかさどっていると考えられています。

夜が明けるとまた人間の領域が広がる。これは、そういう電気がないぼうぼうたる大草原で暮らしていると、実感として私のようなよそものにもわかるような気がします。人間というのは樹上生活をやめて地上に降りてから目が頼りなんですね。鼻はあまりきかない。もし鼻が犬みたいにきいたら、いまの日本の生活なんて臭くてとてもいたたまれないと思いますけども、交通信号なんかも、ある匂いを出して渡れとか止まれとかなると思うんですけども、幸か不幸か人間はあまり鼻がきかなくて、耳もあまりよくないしむしろ目が頼りなんですね。でそういう目が中心の、視覚が頼りの人間にとって、やはり明るいのはいいことで、そのために行き過ぎで文明が闇を放逐してしまった。

昔は夜の暗がりの中で昔話をして、つまり闇の中の声が聞く人のイマジネーションをかきたてたのですけれども、今では明るいことだというふうになって、昔話もテレビとか絵本とか要するに視覚化して、闇のなかで声が喚起するイマジネーションというものを、視覚にたよってせめてしまった。それがいいことかというのは、私はかなり疑問に思うのですけども、そういうふうなことも、このサバンナの家と荒野野という、昼と夜で境目の変わる対比は考えさせてくれます。

こういふふうに考えてみますと、文化と自然という対比そのものがいろいろな文化によって違った形でとらえられているということがわかります。そうしますと、自然という考え方自身を、あらためて日本などそれぞれの文化の中で位置づけ、とらえ直してみなければならぬということになります。日本語では明治以後 *nature* の訳として自然ということばが用いられる前は、自ずからなるというふうな言い方で使われていたぐらいで、江戸中期の思想家安藤昌益が用いてはいますが、一般に明確に定まった概念はなかったようです。いま仮に議論をすすめる上での用語として自然と文化という対立概念を使うとしますと、人間というのはやはり自然の一

部として猿とか猫とか蟻とか、そういうものと連続した生物体として自然の一部であるということは、よほど頑迷な人でない限り認めると思うんですね。そういう意味で私は「自然」というものに、所与としての自然と、それから文化としての自然という二つの面を考えています。所与としての自然というのは人間もその一部である、とにかく現実としてある自然なんですね。それに対して文化としての自然というものは人間もその一部である申しました三つの文化でも、それぞれこれは所与としての自然条件によってずいぶん変わる。さきほどお話ししました山とか森とかあるいは荒れ野にしても、それぞれの土地の所与としての自然によって、自然というのはの表わし方も、それぞれの文化の中での位置も違っているわけですね。つまり自然という概念そのものが文化によって作られているという意味では、「文化としての自然」を、所与としての自然と別のものとして立てることができないかと思ひます。

文化というものの内容を、最も広い意味にとるとはじめに申しましたけども、もう一度いま申しあげたような前提にたつて定義しなおしてみると、文化は究極には個人によって担われている、しかも人間も生物の一部ですから遺伝子によって伝えられるもの、いわゆる本能にもとづいたものも含めるという考え方になります。

本能にもとづくものは含めないという文化の定義もしばらく前までありましたけども、これは人間を他の動物から根本的に区別した見方に由来していて、本能にもとづくものも含めた人間のいとなみの総体を指すというふうに、文化の比較のためには定義を試みたいと思ひます。

一九世紀の末から二〇世紀のはじめにかけて、一種の文化主義の潮流があつて、人間を、その前のそれは逆の自然決定論や生物進化論の影響のマイナス面の行き過ぎた面があつたと思うのです。文化主義ではたとえば言語学のフェルディナン・ド・ソシュールというスイスの言語学者の、人間の言語における、音と意味の結び

つきは文化によって恣意的に、つまり文化の約束で作られたという主張とか、さっきも名前をあげましたフランスの社会学者エミール・デュルケームという、やはり一九世紀の終わりから二〇世紀のはじめにかけて活躍した人も、社会的事実は社会的事実から説明すべきだということを言いました。同じように、人間にとっての文化の営みは文化から説明しなくてはいけないということを、アメリカの文化人類学の創設者であるクロバーという人も言って、遺伝的なものあるいは本能的なものを排して、人間が後天的に学習したものだけに文化というものを見ようとする立場が強くなりました。しかし最近では振り子は逆にもどって、人類遺伝学DNAの研究の発達とか、それからもう一方では霊長類学ですね、猿の研究が進んできて、猿にも文化があるということがごくあたりまえにいわれるようになってきました。私の友人の霊長類学者は、チンパンジーっていわないでチンパンジン（人）っていうんですね。一匹二匹って数えるのは差別的だというので一人二人という。

チンパンジーと人間はDNAの上では非常に近いそうです。そのもとのものから五百万年くらい前に別れて、それぞれの進化の道をたどって、現在見るような人間とチンパンジーなどの霊長類が生まれた。いうまでもなく、今のチンパンジーや猿が進化して人間になったわけではなくて、猿と人間はいわば遠いところ同士の関係にあるわけです。

猿の文化についても相当詳しい研究がされてきて、文化というのが決して人間の独占物ではないということになってきた。そういうところからもう一回、文化というものの定義のし直しが求められています。ただ、たとえば言語能力については、チンパンジーとのコミュニケーションのいろいろな実験の結果でも、これは画然と違うんですね。特に分節的な言語、つまり発声器官で発せられる声を、口腔や舌や歯などの調音器官で分節化して、言葉としての意味をもたせるという行為。人間の言語の特徴は二重分節性にあるといわれています。

ども、ある言語を成り立たせている音を組みあわせて、今度は最小の意味を担った音の単位にわけて声を出して、それを組み合わせていろいろ新しい意味をもちこんだメッセージをつくっていく、これは人間だけにしかできないのですね。それはやはり直立歩行ということと深い関係があって、立ち上がったために声帯が下がってくる。声帯がさがるとともに口腔などの調音機能も発達して、ただ「おー」とか「あー」とかいうのではなくて、音声を分けて発音することができるようになるといわれています。

そういう言語における画然たる違いはあるけども、人間はチンパンジーや他の動物と連続している。そしてさらに遠くまで見れば、蟻とか蜂とか魚とかそういうものとも連続している。ただ本能に基づくといっても、本能というのは生物にとっては個体の維持と種の維持、これは維持というよりも、少しでも先まで生命を保ちたい、これが生物の願いなんです。個体の場合も、種の場合も。その本能の一番もとになるのが、個体維持のために食、種の維持のために性の本能。それによって、個体と種、自分と同じ仲間の生命をできるだけ先まで伸ばそう、それがやはり人間も含む生きるものの業^{ごう}みたいなものだと思うのです。

ただそれを発現させる手段が、人間の場合は実に多様だ。これがやはりいくら遺伝子に規定されているといっても、蜂が巣をつくるというのには巣を作る行動まで全部遺伝子に規定されていますが、人間の場合は家もずいぶんいろんな変化のあるものを作るわけです。地方によっても個人によっても。これはやはり人間が直立歩行をするようになって、そうすると脳が大きくなる、四つ這いだと、みなさんも四つ這いになってごろんになるとおわかりのように、頭が重くてとてもくたびれるんですね。立っていれば、重いものが平気で運べる。重力が直立したからだの下へ向かうからですね。だからアフリカでも今でもさかんな頭上運搬というのはとても合理的な方法で、日本でもヨーロッパでも少し前までかなり広くやっていたのです。

直立歩行によって脳が大きくなると同時に両手が自由になる。そうすると両手でいろいろなものを細工して道具がつくれる。それからさっきお話したように声帯が下がって言葉がしゃべれると、自分で獲得したものを観念として人に伝えることができるから、知識の蓄積が容易になる。そういうことで知識が蓄積されて、人類が進化した。猿人、原人、旧人、新人という四つの段階に分かれますけれども、その猿人「アウストラロピテクス」の段階までいれるとヒトの歴史は四〇〇万年ぐらいたのぼりますけれども、今のわれわれと同じ仲間のいわゆるホモ・サピエンス・サピエンスが、最近話題のネアンデルタール人とは別の亜種ですが、それが地球上に広がったのが十万年ぐらい前から、生物の歴史全体からみればずいぶん新しい話なんです。猿人も原人も旧人も新人も全部アフリカが起源だといわれています。それで十万年ぐらいの間にこれだけ地球に広がった。極北のエスキモーから赤道の熱帯雨林のピグミーとかアマゾンの住民とか砂漠の遊牧民からオセアニアの島で生活している人まで、海拔の高さからいってもチベットやアンデスの高地から、オセアニアの珊瑚礁のような低地、サハラや西アジアの砂漠から中部アフリカやアマゾンの熱帯多雨林まで、実に多様な自然条件の土地に適応して生きることになったわけです。これはやはり大きな謎というか驚異で、人間が道具を使って、つまり文化の力でいろいろな自然条件に適応することができたからこれだけひろがった。

これだけ地球に広がったので、人間の中には身体特徴の多様性が大きいんですね。皮膚が黒かったり、黒いというのは熱帯の強い太陽光線の有害な紫外線を遮断してしまうので太陽光線の強い地帯に適応しているわけですが、そういうふうな長い間の適者生存によって著しい多様性ができた。人類の一番古い友である犬も、人間と共に世界中どこにでもいて、エスキモーからオーストラリアのアボリジニからアフリカのピグミーから、全部犬を連れていきます。ですから犬もまたずいぶん多様です。グレートデンとかマスチフみたいな大き

いのからチワワのように小さいのまで、生物的にはひとつの種で交配すれば子が生まれる。これは人間といっしょに世界中に広がって、長い間暮らしてしかも人間が改良を加えたのでこんなに多様になった。動物の一つの種で犬ぐらい形態が多様なものというのは他にありません。猫は歴史が浅いし飼われている範囲も狭い。つまり人間の場合は、本能に基づくとはいっても、家の作り方、食べものの料理法、婚姻のあり方等々文化による差異が大きく、それが他の生物と決定的に違うと思います。

それでは文化というものは、境をひいて区別できるかという点、境はひけないというべきだと私は思うのです。その前につけ加えておきますと、文化というものは最終的にはひとりひとりの個人が担って生きているといえるのですけれども、同時に、文化は個人に対して拘束力があって、個人は文化の中に生まれ、育ち、文化を学びとり、文化に影響されて生きるわけです。一つの例が言語です。言語にしても自分語というのを作ってしゃべっても、他の人に通じなければ意味がない。結局自分がこどものときから習い覚えた言葉で、それでももちろん他の人と違う個人独自の部分はあるわけですが、他の人と共通な言語を使わなければ、他の人との意思の疎通ができません。食べるものとか着るものも、完全に自分ひとりで原料からすべての過程をつくるということはできない。やはり自分の生まれ育った文化の中で、他の人と多少とも共通のものを食べ、着なければ生きられないわけですね。今のように経済のグローバル化が進むと、外国のものがいろいろと入ってきますけど、そのとりいれ方にもローカルな特色がありますし、地方的な文化に個人が拘束されることは決してなくなりません。それから人との付き合いかた、挨拶の仕方とかもやはり社会の仕来りに従わなければ人とのコミュニケーションが成りたちません。

ただ、個人が文化に拘束されているといっても、個人の一生をとってみてもわかりますが、いろいろな段階

がある。赤ちゃんのころは周りから一方的に受けとるだけです。ところが青春期になるとそれに対して自己主張がでてくる。接する範囲も広がって自分が育った環境とは違う文化に接して、自分の育ったものに対する批判もでてきて、それに対する反発や抵抗もある。それから自分の新しい創造力によって、自分が受けたものに付け加えたり変えたりしたくなる。それが青年期から壮年期にかけて一番盛んで、その段階で文化の変革とか新しい創造というものができるわけです。年取ってくると、変革などめんどくさくなって、個人差はありますけれども、だんだん昔はよかったとか昔はこうしたものとかいって、いわゆる伝統的な仕来りの中に閉じこもるようになる。だから個人の一生をとっても、文化と個人の関係というのは変化があるわけです。ですから個人というのは文化にただ一方的に拘束されているわけでもない。文化というのはある広がりをもっているわけですが、ではその広がりはどこかに境がひけるかというところ、これがひけないわけです。

たとえば言語にはかなりはっきりとしたまとまりがあるようですが、これはいわゆる国民国家というのができて標準語としての国語が決められて、学校で教えこまれる。さもないと方言差は連続的なもので、大陸なんかの場合は、実際に話されている言語については、はっきりここからここまで何語といえないことがある。たとえばドイツ語とオランダ語でも、方言差が連続していて境がないといわれています。けれどもオランダとドイツという国ができて、それぞれ国語を決めて教えればオランダ語とドイツ語は別になるんですね。これは国家を単位にした教育の及ぶ範囲においてできる境界です。宗教はずいぶんはっきりしていそうに思えますけれども、日本人の皆さんの中にはクリスチャンもいらっしゃると思いますけれども、一口にクリスチャンといっても、キリスト教を信じている度合いは実にさまざまです。そうでない人たちの日本人の宗教はなんですかって聞かれると困ってしまいますね。これはアフリカやヨーロッパでも同じで、名目的には日本だって何々宗に登

録されていてそのお寺の檀家で、死ぬとそこのお墓に埋められるという人が多いのですけども、普段別に仏教を信じてるわけではない。ヨーロッパだって一応キリスト教徒が多いけれどもはっきり信じている人は多くはありませんし、教会に熱心に行くわけでもない。なにかのときに、ほんとに苦しいときに何にすがるかというときにまた別のものにすがする場合もある。アフリカでも土地の信仰のあとにキリスト教とかイスラムが入ってきてそれぞれの信者がふえましたが、両方に入っている人も多い。カトリックのミサにもいくけども、メッカに巡礼してアル・ハジという称号をもっている人とか、カトリック教徒で一夫多妻の人とかは大勢いて、そのへんは実に融通無碍で、そうするとカトリックの範囲はどこからどこまでと線はともひけないですね。

他の衣食住の営みについても同じです。まれに川などを境にしてきれるものもありますけどもそれでも人や物や情報の交流は川をこえてたえずあるので、全体としてみれば相当連続してる。そうすると、そういうものの集まりとしての文化というのはどういう単位をとれば比較ができるのかという問題になるんですね。ただ文化の中でも、つまり人間が作り出した営みの中でも、社会というのは、これは文化の一部ではあるけれども、ものによっては境がはっきりした組織をもっているわけですが、国家にしても村にしても学校にしても。その社会というのがまた文化というものを伝えたり変えたり作りだしたりする場になるわけですね。だから社会というのはとりようによっては単位になりうる。けれども一つの社会に一つの文化が対応するか、つまり社会と文化のあいだには一対一のはっきりした対応関係があるかという点、これも必ずしもはっきりしていません。

文化が最終的に個人によって担われているとしても、それもさっきも申しましたように、一生のあいだにもいろいろ変わって、小さいときと中年と年取ってからとで好みなんかまったく変わってしまう人もいるわけです。ですから必ずしも一貫性なしに担われていてずいぶんばらばらなようですが、しかし、たとえば日本とフ

ランスと西アフリカという著しく離れたところを比較してみると、やっぱりこれは違う、連続していないということがわかります。では文化というのは何によって確かめられるのか、研究対象として明らかになるのかというと、まず一つはそれを担って生きている人がことばで表明している規範の束、つまり自分たちの仕来りではこうすべきだ、こうするのが決まりだということがあります。

たとえば朝ご飯に何を食べますかときかれて、朝食はご飯と味噌汁と海苔だというふうに答える。それは一つの規範なんですね。実際にはそうではないこともあるかもしれない。

朝人と会ったときになんていうかと訊ねられれば「おはようございます」と答える。それもやはり一つの規範で、必ずしもそうではないかもしれないけど、やはり文化にはそれを担って生きている人によって意識化されて表明されるような、一つの規範、こうすべきだ、こうするのがこの文化の決まりだという、そういうものが強弱の程度の差はあれ、あるんですね。そういうものの束として一つの文化を考えることもできる。ただこれは今申しましたように、規範が必ずしも全部いつも実行されているわけではないんです。ですから今度はそれを観察する人がいて、毎日記録をつけるとします。どこの社会でも朝食というのはわりあいステレオタイプ化されて決まりきっているんですね。いろいろと変わったものを作る時間の余裕がないからということもあるでしょう。けれども一年中ずっと記録をとってみると、この人は規範としてはご飯と味噌汁と海苔だといったけども、パンとコーヒーのこともずいぶんあったということになったとすると、今度はそれは行動、実際に規範ではなくて行われた結果としての行動の中に見られる傾向性が、観察者の側からは問題になる。だから規範としてはご飯と味噌汁と海苔でも、行動としては六〇%ぐらいパンとコーヒーだということだってありうるわけです。そうするとそのへだたりをどう解釈するかというのは、そういう意識された表明としての規範と、実

際の行動がどうしてそうなったかということを、他の事例との比較で観察者は考えながら、その考えたことを当人との対話でフィードバックして検討するというようにして、手探りで進んでいくわけですね。これは人類学の調査では必ずやることで、その人の意識における規範と、実際にその人がやってる行動の両方を見て調査者は自分なりに考えて、そのあとでまたインタビューして聞く。そういうふうにしてかなり長い間の観察とか資料から、その文化がどのような指向性をもっているかを考えてゆく。自分で直接観察できない過去については、いろいろな文献資料とかあるいは図像資料その他で見えるわけです。

ただこのような調査、検索を、一つの文化についてかなり長い期間をとった場合に、一つの指向性、オリエンテーションというものが見えてくることが多い。で、これは文化のすべての側面についてというわけではないけれども長い時間を通じて変わりにくい文化の指向性というものが抽出できるんですね。これはですからいまいった当事者の規範の表明と観察者による行動の観察とその解釈の往復運動の中から抽出される一つの傾向性、それを両方の積として、しかもそれをもとにかなり長い時間のファクターも入れて抽出された文化というものを、考えることができるのではないかと思うのです。

ですから今ここで日本文化とかフランス文化とかモシ文化というのはそういう形で抽出されたもので、日本人とかフランス人全員がそれをやっているとか、全員がそういう意識を表明しているということではありません。それから、どこからどこまでを地域としてフランスと見るか、どこからどこまでの時代のことかによって結果は違ってきます。そういう地域の問題も含めて、これは時代も限って、今申し上げたような抽出されたオリエンテーションというものを比較してみようと思うわけです。その場合、意味のある形でお互いに異なった三つの文化を参照点として、過去について資料のあるものについては時代を限定した上で、比較してみたいと

思うのです。

フランスと日本の場合は、両方とも一七世紀はじめから第二次大戦後一九六〇年ぐらいまで、いわゆる高度成長期ですね、生活文化がそこで日本もフランスも大きく変わりました。日本の場合も明治維新でもずいぶん変わりましたけれども、六〇年代の変わり方とくらべると、六〇年代を境にした変化の方が国家体制ではなく生活文化においては、変化が大きいし深いと思うのです。たとえば平安時代の『枕草子』なんか描かれているような生活というのは、六〇年代の少し前までは、私などの大学生ころまでは、まだ現実感覚として現代の日本人にも分かったんですね。私の「新人類」の娘が中学で『枕草子』を読んで、あの中に冬の寒い日に炭火をおこして廊下をわたって行くことを描いた文がありますね、そして昼頃になると炭が白くなって醜いというような、そういう感じ。うちで火鉢を使ったり炭火を起したり廊下があったり、そういう生活というのは六〇年代より前まではたしかに日本人の日常生活文化の中にあって、実感としてよくわかるんですね。けれども私の娘なんかそれが実感としてピンとこない。廊下のある家に住んでみたかったなんていっている。今の住居にはたいてい廊下、炭火をもって寒い朝わたっていくような廊下なんかありませんね。だいたい家庭で火鉢や炭を使わない。

他にもいろいろありますけれども、いま例としてあげる洗濯なんかにしても、平安時代から一九六〇年代前までは、日本人は洗濯はしゃがんでやっていましたけれども、電気洗濯機が普及してからしゃがまなくなりました。同じようなことはフランスでも起こっています。この時代に、いろいろな日常的なあるいは基本的な生活活動の軽労働までが機械化されたり、車が普及して地方まで道路が整備されたとか、そういう激変が一九五〇年代から六〇年代にかけて起こるんですね。これはいわゆる先進産業国にほぼ共通していることです。ただ

アメリカではその前からそのような変化があったと思われますけれども。

それから上限の一七世紀はじめというのは、日本では徳川封建制が成立して、それ以前の安土桃山時代の、ダイナミックで外国のものに対しても開かれていた日本人のメンタリティが、徳川以後ずいぶん変わってきたと思うのです。これに対応してフランスだと絶対王政が成立したところから一九五〇年か一九六〇年くらいまでということになります。

もう一つの参照点のアフリカについては、これは私がはじめていったのは一九六二年で、それからずっと調査をしてるわけですが、主な資料はですからまさに他の二つの参照点で対象とされる時代が終わったところから始まっているわけですが、それ以前についてはそれより前の、人類学の詳しい調査はありませんけれども、宣教師とかあるいは植民地行政官が残した記録があります。それから私自身の調査によって聞き取りができた過去のことがあります。私がアフリカで調査をはじめたころはまだ、白人がくる前つまり一八九七年以前というのをちょうど日本で関東大震災前とかそういう話をしてくれる人がいたように、まだ直接体験に基づいて話せる人がいた。ですから一九世紀の終わりぐらいまでさかのぼった事柄は、聞くことが可能だったわけです。ですから、他の参照点日本とフランスとは、絶対年代の上では時代はずれてしまうわけですけれども、もし王国もごく初期の形成は一五世紀に溯るとしても、王国として制度をととのえたのは一七、八世紀ころからなので、そういう意味では他の参照文化である日本、フランスともほぼ対応することになりますし、政治組織としても序列化された階層の上に立った集権的政治体制という、同時代の日本やフランスとも基本的に共通する、比較可能な性格をもっていたと思われる。これは完全に同じ絶対年代の期間の比較ということではなくて、一種の操作モデル、考えをいろいろ検討していくうえに操作するモデルとして、固定した理念型というよりは操作

モデルとして考えることにしたいと思います。

残り時間が少なくなっていましたので、それでは、そういう三つの文化をいまのような意味で対比した場合どういふものが見えてくるか。これはいままでもいろいろなものに発表しましたので詳しくはそれを見ていただきたいのですが、三つの文化について、簡単な例を挙げてみます。

たとえば身体技法、これは文化によって条件づけられた人間の体の使い方ということで、洗濯の例を挙げますと、日本では平安末期からの図像資料でも水ばたにしゃがんで洗濯をしてる女の人の姿がある。江戸時代の資料も同じで、戦後の写真資料も同じ。ただ、古い時代には、長繊維、藤づるとかこうぞとか麻とかそういう固い長い繊維で織った着物を洗濯するときには、足でふんで洗うということも行われていました。足踏みと同じ時に、同じ絵にしゃがんだ洗濯が描かれています。

それではフランスではどういう格好で洗濯していたかという点、ひざまづいてしていたんです。日本人のようにしゃがんでやろうとしたとしても、フランス人にはしゃがめない人が多いのです。それでひざまづいて、濡れないようにひざの前を覆う本立てみたいな木の箱、ケス・ア・ラヴェ (Caisse à laver)、つまり洗濯用の箱とかいろいろな名で呼ばれています。これを村の女の人は自分のものをめいめいもっていて、それをもって川や池のほとりの共同の洗い場、いまでもみなさんフランスの田舎を旅行なさるとあちこちに苔の生えたラヴォール、つまり共同の洗濯場のあとが見られますが、そこに行って洗う。この洗濯場は池なら周りが石でゆるやかな傾斜になっていて、川なら木の床の台が水の上に突き出っていて、その縁にその木の膝囲いを置いてその中にひざまづいて、つんのめるような格好をして洗うんですね。これは絵や写真にも沢山のこっています。アフリカではどうするかといいますと、これは立ったまま、膝をのばして立ったまま上体を深く前屈させて、

足の高さの地面にたらいを置いたり、川の中に入ってそこでじゃぶじゃぶと洗う。

洗濯をするというかなり単純な行為のために、三つの文化でこんなにも違う体の使い方をしているのです。人間は手が二本足が二本あるからみんな同じように動くとは限らないので、他にも歩き方、それから座り方、眠り方等々文化によってずいぶん違うんですね。いま洗濯姿勢としてみた、しゃがむとかひざまづくとか立ったまま前屈するというようなことは、この三文化のそれぞれの中で、他の側面にも現れています。

しゃがむというのは日本人のしばらく前までの生活ではいたるところにありました。ちょっと道端にしゃがんで一服するという光景はよく見られたし、露店やなんかで地べたにものをならべて売ってる場合は売る方も買う方もしゃがんでいろいろみたり、金魚すくいなんかもそういう姿勢でやっていたわけですね。ひざまづくというのは、ヨーロッパでは神様にお祈りするときの姿勢で、教会には椅子の前の下に細長い木の板が横にわたしてあって、そこにひざまづいてお祈りするようになっています。日本では神仏に祈るときひざまづきませぬね。このしゃがみ、蹲踞というのは足の甲と足のすねの前面の骨の関節面が鋭角になる、そうするとしゃがめるんですね。これはよく相撲の実況中継で仕切りに入る前に、力士が蹲踞するといいますが、あれはほんとの蹲踞ではなく踵があがってるんですね。だから相撲の仕切りの前のしゃがみとか、野球のキャッチャーの捕球姿勢は、ああいうふうには踵が上がってると、いま述べました足の前面が鋭角に曲がらなくて西洋人でもできるわけですが、そうではなくて踵をぴたり地面につけてお尻をうんと下げてしゃがむ、これが私がいまとりあげている蹲踞姿勢です。日本人でも今の若い人だと、椅子生活が長いからしゃがめない人もかなりいるんですね。それからアフリカでもテストをしたのですが、しゃがんでから、両手をのばしたままだんだん前から横にひろげていくんです。途中でひっくりかえってしまうんですね。ほんとにしゃがめる人は、これでも全然平

事です。びくともしない。みなさんもおうちにかえたらやってみてください。ひっくりかえらないかどうか。アフリカではこういう深い前屈姿勢っていうのは洗濯のときだけではなくて畑を耕すときとかいろいろなきに使うんですが、畑を耕すときには深い前屈姿勢でやるので鍬の柄がみんな短いのです。せいぜい四〇cmぐらい。で、どうしてこういうふうになるかというと、これは風土と自然条件と非常に深い関係があってとにかく浅く耕すということと、向こうの主作物は高稈性穀物、つまり茎の背が高いものごととかとうじんびえというふうなもので低稈性穀物の稲や麦とは違うんですね。そのために除草をするときにかなり伸びたものの間にもぐりこむようにしてやらなければならないとか、これは簡単には説明できませんが、要するにそういう自然条件との関係で体の使い方とか道具、鍬の柄が長いか短い、それも決まってくるのです。

日本もアフリカも夏雨型で、つまり一年のうちの暑いときに雨が多く降ってその間に作物を育てるので、雑草との戦いが農作業の非常に大きな部分を占めています。冬雨型のところが支配的なフランスでは、とくに冬作の人間の食べる小麦の場合はこれは雑草取りの心配が全然ないんですね。だから種をまく前に広い面積を牛馬に引かせた大型の犁で十分にたがやしておいて、そして後は、ミレーやゴッホの絵にもありますが、種子をばらまきをすればいい。草取りもしない。ただ春先にあざみがかかなり生えてきて、あざみをとる長い柄のついた道具があって、それであざみを掘りとるくらいなんです。ですから夏雨型、冬雨型で農業労働の形態とかそれに使う道具とか作業姿勢もずいぶん違ってきます。日本の場合は田の草取りというのは昔はとても大変だったんです。

こういう身体の使い方は育児法、子供を育てるときの習慣にもかかわっていて、アフリカの場合はおかあさんのお尻の上、これはアフリカの人の体形がお尻の上がぐっとくぼんでいてそこに赤ん坊をのせて足を深く折

り曲げた姿勢でくくりつけるんですね。だからおかあさんの背中の下の方にありますから日本のおんぶする肩に手をかけますけど肩に手がかけられない。だから母親の胸に手をまわしてつかまる。昔ダッコちゃんという人形がありました、ああいうふうにつかまってしかも離乳までがかなり長いので足を深く曲げた姿勢で括り付けられている期間がずいぶん長いんですね。日本の場合とはくに中部地方から東北の方は、いろりに落ちる危険があるので「えじこ」に入れて「いづめ」とか「えじこ」とかにああいう籠や「ひつ」みたいのに入れて、あぐらをかいて座ったまましばらくつけて動かないようにしておく道具がありましたし、日本の場合とはにかくこれはまた人間の体と床面との問題になりますけども、違うということが人間の移動の仕方の成長過程での一つの段階として重要でした。これはヨーロッパの場合は床面を土足で歩くということもあるし、キリスト教の信仰もあって人間が四つん這いになることを嫌うからなのでしょうが、四つんばいになることを非常に嫌って、傘立てみたいな、「エトウイ・ア・アンファン」(etui d'enfant)とフランス語でいいますが、直訳すれば「赤子鞄(さや)」とでもなるでしょうか、それに赤ん坊をいれて、しゃがんだり四つん這いにさせない、足をのばして立ったままにしておく。だから足がのびて要するにがにまたにならない。足をぐるぐる布でまく、これはいろいろな絵にもありますし、比較的最近まで行われていたんですね。ですから足がそろってまっすぐに伸びますけども、しゃがめなくなってしまうんですね。そういうふうな育児法ともずいぶんつながってくるのだらうと思います。

その他これは私が音文化、サウンドカルチャーと呼んでいる音声言語や音楽も含む音のコミュニケーションの世界でも、これは日本語とたとえばアフリカの言語というのは両方とも擬態語、音でないものを言語音であらわすというのが非常に豊かでヨーロッパにはそれがなにかということがあります。たとえば日本で太陽が

カンカン照るっていいですけども、別にカンカンと音がするわけじゃないんです。モシのことばでは「バスバス」照るといふ。ジロジロ眺めるといふけど、ジロジロって音がするわけじゃないですよ。これはモシ語では「ニャゴニャゴ」といいます。そういう視覚的な印象とかあるいは触覚的な印象をそれを言語音で表わすっていうのが日本語やアフリカ語はたいそう豊かでフランス語の場合はそれがほとんどないといってもいいくらいなんです。

で、それに対して今度は自然の音とかあるいは自然の光景を楽器で描写するとなると、たとえば日本だと尺八の「鹿の遠音」とかそれから小鼓で波の音をまねたり、それから雪音って雪は音がしないけども桴の先を布でまいたもので太鼓をしずかにどんどんどんって打つと、舞台なんかで雪がどんどん降ってる情景を強める。それからヨーロッパだとたとえばサンサーンスの『白鳥』のように、白鳥が湖の上を静かに泳いでるのは音がしませんけどもそういう情景を楽器音で表現する、というふうなこれは一例にすぎないので、例は私の『聲』（ちくま学芸文庫）という本にたくさん書いてあります。このように、日本とフランスが共通の面もあり、アフリカと日本が共通の面もあり、逆にフランスとアフリカが共通の面もあります。これは「技術文化」とか価値観とか労働観についてもいえることで、それについても詳しくお話したかったです、時間がありませんので、あとでもしご質問などがあればお答えいたします。

この「技術文化」ですが、アフリカも含めてですね、まずはじめに日本と、フランスをはじめとする西洋とこのを対比すると二重の意味での人間依存性と非依存性というふうに対比させることができるのではないかと。二重の意味での人間依存性というのは、日本の場合は簡単に機能未分化の道具を人間の巧緻性、器用さにたよって多目的的につかいこなす。

たとえばお箸なんかいい例ですよ、簡単な二本の棒でそれをいろんなふうに使え。それに対してヨーロッパの場合は、人間の器用さに頼らないで誰がやっても同じようにより結果がでるように道具を工夫するという方向にずっときた。これはオリエンテーションですね。だからこれで川舟をひく例を私はよく出すんですが、日本の船頭さんみたいに竿を川底につきたてて舟で押してこぐというのは簡単なようだけでも、私もインタビュしてききましたが、ものすごくむずかしいんですね、竿をたてるあの一瞬の呼吸が。早すぎるとつかえて進まないし、遅すぎるとつんのめって流される。それに対してフランスの場合は馬に船をひかせる。曳船道、「シュマン・ド・アラージュ」(chemin de halage) というのが川や運河の縁にあって、陸上から馬でななめに舟を引っ張るわけです。でこれはななめに引っ張ってるから岸にぶつからないようにかじでたえず調節しなければならぬし、馬を舟の上で飼う設備をつくったり、とにかくまあいろいろ面倒なんです、そういう面倒をいわずにやる。これは第二の人間非依存性。つまりなるべく人間のエネルギーを使わないで人間以外の動物や風力や水力を使うとするオリエンテーションにつながる、と思うんですね。

逆に日本の場合は人間の労力、手間をおしまずかけて良い結果を得ようとする。だから徳川幕藩体制以後急速に全国にひろめられた水田稲作でも、灌漑した水田の稲というのは同じところに何年でも連作できるまれな栽培植物なんです、先祖伝来の水田、限られた水田を、労働生産性は無視してとにかくそこにたいへんな労働力を投下して収穫を上げる、つまり土地生産性を上げることしか生きる道がないという状況の中で強化された指向性だと思うのです。日本でいままも企業戦士が残業して一所懸命やる、フランスだと時間がくればさっさと帰って家族で食事をするというのと大きな違いだと思うのです。これはそういうものを実現させる社会の価値観や社会関係のあり方、つまり個人の権利とか自由などを重く見るのと、それから上の人に従属する、とい

うふうな価値観が支配的なところとの違いも影響していると思います。

この二重の意味の非人間依存性は機械を発達させたわけでこれは馬や家畜の力や風力や水力から、一九世紀以後は化石燃料の石炭や石油、それから原子力というふうになった。こういうふうには人間以外のエネルギーを使うとエネルギー源からそれを働かせる場所までエネルギーを伝達する装置が必要なので、トランスミッションの装置を工夫することになる。ですから歯車とか連結桿とかベルトとか、往復運動を回転運動に変えるとかその逆とか、それがヨーロッパでは非常に発達しましたけれど、日本ではそのどれもがほとんどないに等しいんですね。ねじというものも明治まではなかった。種子島の火縄銃をまねて日本で作るとき、銃身のうしろを、とりはずし可能な形でとめるねじをつくるのに堺の鍛冶屋さんは苦労した。結局「捻錐」というのを工夫したのですが、ここだけで、ねじの原理は他には応用されませんでした。

ですから日本やアフリカでは道具というのはあくまでも、人体の延長としての道具なんですけど、機械というのはエネルギー源が別にありますから、人間と独立のものができて、人間の労働はエネルギーの伝達装置を調節するところに使われるようになりました。これは自動車を運転するという例を考えていただければはっきりしますが、自動車以前の、馬にひかせた犁や車を、人間が操作する行為にもすでに表れています。そして結局近代技術文明というものができた。

西洋の近代技術文明が実現したものは、人間の根底にある欲望、「もっと早く、もっと多く、もっと楽に」という三つの欲望を満足させるのに適していたので、世界に広まったのだらうと思います。ただそういうものが、いま地球温暖化問題で会議もやっていますけども、資源枯渇、環境破壊などで今もう行き着くところまで来てしまった。そしてそれのようになっていた旧約聖書の『創世記』以来の、神が自分の姿に似せて人間をつくり、

他のものを人間が支配するようにした、それが人間中心主義の思想上の基礎を与えましたし、自然というものを神が人間に与えた偉大な書物とみて、それを解読して自然を支配するようにつとめるという自然神学などの立場につながって、いろいろな紆余曲折はあったにしても、基本的に西洋の近代技術文明にいたる過程を支えてきたと思うわけです。

それと同時に『創世記』によると神は人間に対して、「産めよ増えよ地に満ちよ」といったんですね。ところがいまは地球上の人口はまもなく六〇億で、とくにアフリカやインドなど貧しい地帯の人口増加が著しい。人口爆発寸前で、神のことばを実行したら大変なことになる、というのが眼にみえてきた。そこで西洋近代の技術文明と人間中心主義が支えてきた近代ヒューマニズムというものが、いろいろなところで矛盾に逢着しているわけです。きょうはその価値観のところを十分にお話できませんでしたが、そういう西洋近代技術文明というものが普遍的なものではなくて、それもやはりその三角測量でわかるように、ローカルなものの一つで、ただその一面が世界に迎えられたという点をもう一度根本にさかのぼって考え直す必要がとくにいま大切だ。今私があげた三つの点は単に私がたまたま関わりあっただけですが、他にももっと参照点を増やして、地測の三角測量のように広い地面を測っていったって、多様な特殊をつきあわせるところから新しい普遍というものを求めていく努力をしなければならないところに、私たちは今さしかかっているのではないかと思うのです。そのためにも文化の比較が大切で、今後の国際交流が重要性を増すのではないかと思っています。

(本稿は、一九九七年二月四日、「国際交流学会」設立記念講演の記録に手を入れていただいたものです。)

講師紹介…かわだ・じゅんぞう

一九三四年生まれ。人類学者。東京大学教養学科（文化人類学）卒業。パリ第五大学民族学博士。埼玉大学、東京外語大学ア
ジア・アフリカ言語文化研究所を経て、現在、広島市立大学国際学部教授。著書『西の風・南の風』（河出書房新社）ほか。